

アジアの子ども達への車いすダンスの普及 および継続方法に関する研究 2

——認定 NPO 法人との連携プロジェクトの意義と可能性——

寺 田 恭 子

Dissemination and Continuation of Wheelchair Dance for Children in Asia

—Cooperation with Certified Nonprofit Organization, Meaning and Possibility—

Kyoko TERADA

1. はじめに

2015年に国連総会において採択された持続可能な開発目標「SDG's: Sustainable Development (Goals)」のスローガンは「誰一人取り残さない」である。大人も子どももすべての人たちが豊かに生きられる社会の構築が求められる中、特に社会的弱者とされる子どもたちの現状はどうであろうか。

世界のあらゆる国の子どもたちが置かれている現状は、歴史的な背景や政治・経済状況等により大きく異なっている。まして障がいがある子どもたちに関しては、その差が一層顕著になっていることは明かであろう。特にアジア圏内のいわゆる発展途上にある国々においては、障がい児者に対する福祉政策が国の政策の優先順位から見ると下方に位置づいており、課題は山積している。

そこで、アジアの障がいのある子どもたちへの支援において、著者は子どもたちが健康的な日常生活を送るという観点から身体活動の重要性を指摘してきた。子どもたちに障がいがあっても、その身体でよりよく生きる健康状態を支援して行くことは、日常生活の QOL の向上につながる。日本国内では2020年の東京オリンピック・パラリンピックが決定したのち、障がい児者のスポーツへの関心度も徐々に高まってきた。しかし、障がいのある子どもたち、また特に重い障がいがあり既存のスポーツや運動に参加しにくい人たちへの運動およびスポーツの普及にはさらなる介入が必要だ。日本ですらこのような現状なので、障がい児への支援体制が十分に確立されていないアジア諸国においては、まずその必要性について支援者が理解し、実践できる環境を作っていくことが重要である。

著者は2017年度から、アジアの中で特にタイとインドネシアの障がいのある子どもたちとその支援者（家族・教員・介助者）に着目し、アジアの障がいのある子どもたちを支援する認定 NPO との協働によって、障がいのある子どもたちに車いすダンス（運動方法）を提供し、

さらに運動実践環境作りへの取り組みに対する提案を行ってきた。

本研究では、この取り組みを基盤として、日本国内の認定 NPO 法人と、その団体の海外拠点である団体の協働による取り組みを通し、車いすダンスプロジェクトの意義や可能性を探りながら、さらに充実した支援として本活動が発展していくための具体的なあり方を提案しようと試みた。

2. 障がい児を支援する認定 NPO 法人アジア車いす交流センター(WAFCA)の概要

認定 NPO 法人アジア車いす交流センター (WAFCA : Wheelchairs and Friendship Center of Asia、以下 WAFCA) は、株式会社デンソーの創立50周年を記念する社会貢献事業として設立した。本団体は、1. 日本及びアジアでの車いすの普及活動を通じて、障がい者が社会で自立できる環境づくりを行う。2. スポーツ、教育分野における支援、交流を通じて、バリアフリー社会の実現に寄与することを設立目的としている。以下の表は WAFCA の概要である。

表1 WAFCA 概要⁽¹⁾

代表者	榎田勝利
住所	〒448-0834 愛知県刈谷市司町1丁目2番地 ふれあいプラザゆうきそう内
設立	1994年4月
事業規模	5,149万円(2019年度予算)
会員数	2,720名(個人2,665名、団体45名、2018年12月末現在)
活動国	タイ、インドネシア、中国、日本他
活動内容	<p>〈海外〉</p> <p>■車いす支援事業 タイ、中国、インドネシアにおいて、政府の支援が行き届いていない地域に暮らす障がい児・者に対して、一人ひとりの身体や生活のニーズに合った車いすを提供。</p> <p>■障がい児教育支援事業 教育支援基金を設立し、奨学金による障がい児の就学支援や、学校のバリアフリー化工事、保護者・教員・地域住民を対象とした障がい理解セミナー、障がい児同士の交流を深める合宿プログラムなどを実施。</p> <p>■交流事業 障がい児やその家族、専門家、WAFCA 支援者、未来を担う若い世代が、互いに行き来する Face to Face の交流を実施。</p> <p>〈日本〉</p> <p>■車いす病院 WAFCA 事務所併設の工房で車いすや自転車の修理を実施。地域の方との繋がりづくりを行うと共に、収益をアジアの車いす寄贈活動費用に還元。</p> <p>■障がい理解活動 地域の小・中・高等学校へ出向き、多文化理解、障がい理解を広める授業を実施。</p> <p>■広報・啓発活動 各種イベントでの活動紹介、フェアトレード商品の販売、活動レポートの発行。</p>
行政との連携	<p>■2011年東日本大震災支援</p> <p>刈谷市と協働し、放置自転車、家庭の中古自転車を修理再生して被災地に300台輸送</p>

	<p>■刈谷市国際化多文化共生推進委員 国際化、多文化共生のビジョンづくり及び具体的な施策の検討に参画</p>
海外拠点	<p>〈WAFCA タイ〉 (WAFCAT) 369 M.3 Teparak Rd., T. Teparak, A. Muang, Samutprakarn 10270 Thailand TEL: +66 (0) 2758-4646 (2442) FAX: +66 (0) 2380-1673 https://www.wafcat.or.th/en/site/index 〈WAFCA インドネシア〉 (WAFCAI) Jl, Gaya Motor I No. 8 Sunter II, Tanjung Priok Jakarta Utara 14330 Indonesia TEL: +62 (0) 21-651-2279 EXT: 419 FAX: +62 (0) 21-651-2716 http://wafcai.or.id/</p>

また、表にも記してある海外拠点のタイ、WAFCAT (Wheelchairs and Friendship Center of Asia Thailand) は、WAFCA と同時期に設立した。さらに、2007年から中国における活動を展開させ、2014年にはインドネシアに WAFCAI (Wheelchairs and Friendship Center of Asia Indonesia) を設立している。

3. 運動機能向上と車いすダンス

車いすダンスは障がいのある人となない人が共に楽しめるダンスであり、競技スタイル、レクリエーションおよびリハビリテーションとその幅は広い^[1]。著者は、国内における車いすダンスのサークルを主催し、また特別支援学校での車いすダンスの実践^[2] および様々な施設での車いすダンス講習などを通して、多くの子どもおよび老若男女の個々の身体に適した車いすダンスによる運動方法を提供してきた。そのノウハウを活かして、車いすダンスが最重度脳性麻痺者 (成人) の呼吸循環器系に及ぼす好影響を明らかにし^{[3], [4], [9]}、障がいの重い人たちへのスポーツへの可能性を示した。

呼吸循環器系のフィットネスに関する論文はパイロット研究が少なく、ましてや重度脳性麻痺者を対象としたものはほとんど見当たらない^[5]。また、障がいのある子どもを対象としたフィットネスに関する研究は、Rose ら^[6] の GMFCS⁽²⁾ レベル I からレベル III を対象とし、歩行スピードを健常児と比較したものなどがあるが、その数は決して多くない。さらにどの研究も長く継続して行えるような運動方法を提供しているものはない。Pitetti ら^[7] は成人の歩行可能な脳性麻痺者 7 名にトレーニング (コンディショニング・プログラム) を提供したが、のちに継続できたものは 1 名であり、障がい者にとって、運動の継続がいかに困難であるかが課題として残った。

このような経緯の中で、著者らの研究は、最重度脳性麻痺者のトレーニング効果を明らかにした世界で最初の研究となり、その結果は、必然的に重度障がいのある子どもたちの身体活動の可能性の広がり示唆するものになった。さらに、車いすダンスは楽しく実践でき、発表するチャンスを作るなど、目的を持って楽しく継続できる運動でもある。よって、車いすダンスは、重度脳性麻痺児者はもちろん身体障がい児者にとっては仲間との交流や楽しみのみならず、

健康な身体を維持するための運動方法として積極的に導入すべきものであると言える。

4. 2019年度のアジアにおける車いすダンス実践

1) タイにおける車いすダンス実践

タイにおける車いすダンスの実践は2017年から始まり、2019年度は3年目となる。タイでは、2017年度は障がい児財団を中心としてナコンナヨック県で車いすダンスの宿泊キャンプを実施した。さらに、半年後に障害児財団を再訪し、継続状況について参加者のフォローアップ調査を実施した。調査の結果、多くの親子が車いすダンスを可能な範囲で継続し、子どもの機嫌がよくなった、車いすの介助を怖がらずにやれるようになったなど成果を明らかにすることができた。しかし、自宅で一人でやっても楽しくない、みんなで集まってやりたい、誰かが声を掛けてくれたら参加したいという声も上がった。このような事前調査を参考にして、2018年度からは障がい児の母親たちが中心となって活動する自助グループに車いすダンスを教えた。その自助グループは車いすダンスをレクリエーションとして日常生活に定期的に取り入れ、またその成果を発表できるチャンスも掴み、“重度障がい児とその家族が楽しむ車いすダンス”という文化を発信している。

2019年度は、車いすダンスをさらに学び、自らが楽しむ内容をボトムアップしていくことを目的とした。また、12月に開催される WAFCAT（アジア車いす交流センター タイランド）の20周年記念イベントに出演するための振り付けも行った。

a) 2019年8月 車いすダンスキャンプのタイムテーブル

1) の経緯を踏まえて、2019年8月の車いすキャンプは、以下のプログラムで実施した。

Day 1：8月24日（土）

時間	プログラム	備考
07:00	朝食、会場へ移動	
08:00	会場準備	
09:00	参加者受付、名札、Tシャツの配布 動作法実践とアンケート	
10:00	開会式	
10:30	車いすダンス応用講座①	1.5時間、リクリエーションあり
12:00	昼食	
13:00	車いすダンス応用講座②	1.5時間、リクリエーションあり
14:30	午後のおやつ	
15:00	車いすダンス応用講座③	1.0時間
16:00	1日目のまとめ	
16:30	ホテルへ移動	
18:00	夕食（バーベキュー大会）	

Day 2：8月25日（日）

時間	プログラム	備考
07:00	朝食	
08:00	ホテルをチェックアウト、会場へ出発	
08:30	会場に到着、準備、ウォームアップ	
09:00	動作法指導 動作法個人指導 車いすダンス応用講座④	ダンスは12/14のステージ振付け
10:00	休憩、おやつ	
10:30	車いすダンス応用講座⑤	12/14のステージ振付け、ビデオ撮影
11:30	閉会式	
12:00	ビーチへ移動	
12:30	ビーチで昼食	
15:00	バンコクへ移動	
18:00	ホテルにチェックイン	スクンビット・ソイ26 フォーウィングスホテル

b) 実践内容と振り返り

2日間のダンスプログラムでは、参加者全員が積極的に参加し、母親たちが希望するタイの曲で振付を完成することができた。母親たちとのディスカッションでは、自分たちがタイでの先駆者となり、多くの仲間たちに車いすダンスの楽しさを伝えていきたいという声が挙がった。また、家に引きこもっている障がい児のいる家族が活動的になるようなきっかけとしても車いすダンスを使いたいと、ルン代表からの発言もあった。具体的な新しい試みとしては、今回学んだことを週に1回練習し、その様子を YouTube に挙げることによって、自分たちのモチベーションを高めていきたいという案が上がった。

タイの母親たちは、指導者が日本人のため、年に1、2回程度しか教えてもらえないことを危惧しながらも、キャンプという形をとって行うことで集中的にできることを利点と捉えている。指導するこちら側は、スカイプや YouTubeなどを積極的に利用し、さらに指導ができるようにしたいので検討を重ねて進めていきたい。今回は参加者と寝食を共にして、先回よりもお互いをよく理解し交流を深められたことによって、相互のモチベーションがさらにアップした。このような体験も含めて次につなげていきたい。

また、今回の会場は特別支援学校であったため、校内の見学も可能となり、タイの障がい児教育についても通訳から簡単なレクチャーを受けることができた。



写真1 キャンプ参加者の集合写真⁽³⁾



写真2 車いすダンスの集合写真



写真3 WAFCATのメンバーと一緒に

2) インドネシア（ジャカルタ）における車いすダンス実践

インドネシアもタイと同様に2017年から車いすダンスの講習を始めた。インドネシアはジャカルタにあるサヤップイブ財団がその中心となっている。本財団は1955年にジョグジャカルタで設立され、ジャワ島西部に3拠点を持つ社会省管轄下の財団である。訪問先の施設は、親と暮らせない子どもの療育と近隣に住む障がい児も含めたりハビリテーションおよび障がい児への教育支援等を行なっている。5歳から23歳までの男女35名と先生および2交代制の介助スタッフが共に生活している施設である。知的障がい児はこの施設から学校に通い、重度障がい児の毎日の通院送迎は教員が担当する。現在では特別支援学校の役割も備えているので車いすの子どもは内部通学をするが、重症心身障がい児は市内に受け入れ先の学校がなく、十分な教育を受けることができないのが現状である。

因みに、インドネシアでは県レベルで1校程度しか特別支援学校がない。また、障がい別の学校もないという厳しい現状がある。通学できる子どもは聴覚障がい児、知的障がい児、松葉杖使用児など、比較的障がいが軽い、あるいは自律的に身の回りのことができる子どもが優先される。このような現状から、本校は内部に特別支援学校を作り、空き地に学校を建設し、保護者がいても重度障がいの子どもたちが通学できる教育環境を作ろうと計画している。

a) 2020年2月の車いすダンスキャンプタイムテーブル

2)の経緯を踏まえて、ジャカルタでは以下のようなスケジュールで車いすダンスを実践した。

Day 1：2月21日（金）

時間	プログラム	備考
07:30	ホテル出発	
08:30	サヤップイブ到着 会場準備	
09:00	開会式 オープニングダンスパフォーマンス、挨拶	
09:30	車いすダンス応用講座①	レクリエーションあり
11:30	昼食 金曜礼拝	
13:30	車いすダンス応用講座②	レクリエーションあり
15:00	1日目終了 まとめ	
17:00	ホテルへ移動	

Day 2：2月22日（土）

時間	プログラム	備考
07:30	ホテル出発	
08:30	会場に到着 準備 ウォーミングアップ	
09:00	車いすダンス応用講座③	
12:00	昼食	
13:00	車いすダンス応用講座④	
15:00	内部発表と振り返り 閉会式	365日の紙飛行機（インドネシア語バージョン）
16:00	ホテルに戻る	

b) 実践内容と振り返り

サヤップイブ財団での車いすダンス講習は、オープニングでサヤップイブ財団の子どもたちと職員によるオープニング車いすダンスで幕を開いた。2017年に学んだ車いすダンスを毎週金曜日に活動として取り入れている本財団のメンバーは、車いすダンスの学びを活かしながら自ら新しいダンスを考案し、来客や何かのイベントがある度にその車いすダンスを披露してきた。車いすダンスの発表では、多くの子どもたちが笑顔を見せており、継続して活動することの大切さを実感した。

財団のメンバーと新規に参加した母子（身体障がいのある子どもと母親）らは、2017年の

基礎ステップを踏まえて、新たな曲によるワンランク上の車いすダンスに挑戦した。難しいステップも若い先生や介助者が早く習得し、お互いに練習し、短い時間の中で習得しようと必死であった。練習中は子どもたちのみならず多くの大人が笑顔で車いすダンスを楽しみ、そのリラックスした姿が子どもたちに安心感を与えた。子どもたちも非日常的な車いす動作に声を上げながら、車いすダンスを楽しんだ。

講習は、レクチャーと実践（基礎・応用・遊び的要素を取り入れた車いすダンスレク）から構成され、2日間誰一人として脱落することなく終了した。終了後に初めて外部から参加した母親は、「車いすダンスを初めて知り、とても良いものだったと思った。また子どもと一緒にやりたい」という感想を述べ、また財団のスタッフは、「レパートリーが増えたので、これからの練習はさらに充実する」と答えた。また、今後は100名以上を集めて車いすダンスを行い、いつかはその人数でギネス記録を達成したいと強い意気込みが見られた。



写真4 講習会の垂れ幕



写真5 オープニングの風景



写真6 車いすダンスの練習風景



写真7 練習後の写真

5. WAFCA と2つの海外拠点とのつながり・その視覚化と今後の課題

2つの海外拠点（WAFCAT/WAFCAI）においては、WAFCA スタッフが中心となり、WAFCAT および WAFCAI のスタッフを通して、両国の障がいのある子どもたちの支援に取り組んでいる。タイの WAFCAT は、2018年度まで現地の事務局長として日本人スタッフが9年間務め、そのスタッフが2019年度に帰国し WAFCA の事務局長として車いすダンスプロジェクトを継続している。よって WAFCA の事務局長がタイ国特有の文化や障がい児を教育支援するタイ国内の現状についてもよく把握していることもあり、WAFCAT と WAFCA の連携は安定している。インドネシアの WAFCAI は、タイと同じく2018年度まで日本人スタッフが在駐していた。よって、2018年度まではプロジェクトの内容の構築や現地での問題点なども日本に伝わりやすかった。2019年度からは日本人スタッフが不在となったため、2018年度まで現

地に在駐していたスタッフの力を借りて、2019年度のインドネシア車いすダンスプロジェクトは実施可能となった。今後は、インドネシア WAFCAI に日本人スタッフが不在の中で、車いすダンスを継続していくことになる。このようなそれぞれの現状の中で、各国が車いすダンスを継続するのみならず、その活動を広げていくためにどのような課題があるかを視覚化する必要があると考える。以下の表は著者が考える5つの観点からの評価を◎○△で視覚化したものである。

表2 5つの観点から見る評価

	車いすダンス 実施	継続的实施	着実な発展の 可能性	日本との交流の 実現性	国内への広がり
タイ	◎	◎	○	△	△
インドネシア	◎	◎	○	△	○

表2の5つの観点から両国の特徴をみていくと、「車いすダンス実施」では、WAFCA と WAFCAT 及び WAFCAI が連絡をとり、日本から講師が各国に行って車いすダンスを講習するという一過性の仕組み中では、車いすダンスの実施は可能である。タイもインドネシアも新しいことを学びたいという意欲は強く、そこに海外からの講師が派遣されるのであればモチベーションはさらに高まる。

タイの場合は、2回目から寄付金により「車いすダンスキャンプ」を実施した。非日常的なイベントの開催はさらに親子のモチベーションを高めた。また、対象となった団体は、この活動を自分たちで継続していきたいという気持ちも強くなっていったという。そのような視点でいうと2項目の「継続的实施」も十分に可能だと判断できる。しかし、車いすダンスを継続したい団体の方向性と WAFCA 及び WAFCAT の目的やサポートのあり方との間に歪みが生じる可能性も否定できない。よって、今後もディスカッションを重ね、双方の良い関係性を保っていくことが重要である。

一方インドネシアでは、サヤップイブ財団という財団が核となっているため、車いすダンスの講習後に継続して練習できる時間と場所が確保されていることは大きい。ここでは、子どもたちとともに車いすダンスを練習する教師やヘルパーがおり、またサヤップイブへの訪問者や何かしらのイベントの際に、車いすダンスの披露で歓迎するという形が定着してきた。サヤップイブの中心となる教師が、財団以外の障がいのある子どもたち（その子どもたちを支えるスタッフ・教員を含む）に向けて講習を行っていけば、確実に継続され、「着実な発展の可能性」はタイより高くなる可能性もある。タイの場合、「着実な発展の可能性」を妨げている要素があるとすれば、1つは助成金の獲得の有無であり、もう一つは車いすダンスを学ぶ集団の多様な特性である。タイで発展の可能性を広げるためには、対象となる組織がより安定していることが重要だ。また、そのような外部組織を探し、団体についてのリサーチを丁寧に行って車いすダンス講習を実施するという日本側の体制も必要だと考える。

「日本との交流の実現性」に関しては、資金面での調達が厳しい状況にある。また、タイや

インドネシアの障がいのある子どもたちの海外渡航を考える場合、健康面でのサポートを始め心身ともに全面的なサポート体制が欠かせない。特に車いすダンスの場合は重度障がいのある子どもたちも参加しているため、重度障がいのある子どもたちに対するケアや親が仕事を休めるかななどの問題を1つずつクリアしていかなければならない。昨今では、コロナ禍において健常者でも海外渡航は難しいという現状がある。そのようなことから考えると、オンラインでの交流を積極的に駆使し、新たな交流の形を構築していく必要性が指摘される。また、日本の子どもたちへの車いすダンスの普及は現在足踏み状態である。特別支援学校等では、ボッチャなどの重度脳性麻痺者を対象としたパラリンピックスポーツがここ数年で取り入れられており、またその認知度も上昇している¹¹⁰⁾。しかし車いすダンスは、重度障がい児の場合は特に一緒に踊るパートナーが必要なことや、ルールや決まったノウハウがないこと、またダンスというジャンルに抵抗のある人も少なくないことから、やってみたいけれど指導者がいない、わからない、などのネガティブな声が上がることもあり、浸透を妨げている。WAFCAは愛知県刈谷市を拠点としているので、その刈谷市内、あるいは近隣の特別支援学校などを中心として、車いすダンスにチャレンジする子どもたち（先生方）を開拓することが必要である。また開拓するためには「誰にでもできる車いすダンスの基本」を気軽に学べることが必須である。その学びをどのように展開していくか。それはやはりオンラインが大きな鍵を握っていることは言うまでもない。新しい生活様式に適した重度障がい児・者たちの身体活動の実施・継続という観点から考えても早急に具体化する必要があるだろう。

次に各国内への広がりであるが、現在車いすダンスを学んできた団体に期待するとなれば、インドネシアのサヤップイブ財団にはさらなる可能性があると言える。しかし、冒頭にも記したように、インドネシアでは日本という特別支援学校が少ない。道端に障がい児が捨てられるということもあるという現状の中で、どれだけ車いすダンスを広めることができるかは未知数である。しかし、最悪の現状があったとしても、健康な身体を作るための運動の必要性への理解、多くの人と関わり、楽しみによって人生を豊かに生きることの大切さを伝えられる活動が継続して存在することは極めて重要であろう。この活動を継続しながら、広がっていく糸口を絶やさないようにしなければならない。

タイの場合は、より多様な団体への働きかけを可能にし、様々な角度から車いすダンスを学ぶ人たちを応援するシステムが必要ではないかと考える。昨年度に車いすダンスを提供した自助グループは、すでに自分たちで活動を展開し発表の場も獲得している。多様な制度の中で、多様な団体があるということを考えると、タイでは様々な地方に出向き、車いすダンスを継続的に実践できそうな団体をリサーチして取りかかることが必要だろう。

最後に、両国に必要なこととして、WAFCAT 及び WAFCAI とつながる医療機関、あるいは医療系スタッフ（PT や OT など）の連携、体育・スポーツを専門とする専門家との連携がどこまで可能かを今後調査していく必要がある。インドネシアにおいては、ジャカルタ市内の病院勤務医が WAFCAI の理事であるため、現地の人的パワーやつながりを大いに利用すべきである。また、指導者の育成は絶対に欠かせない。両国内で、どれだけの指導者を育成できるか

が今後の鍵となるだろう。そのためには、WAFCA も何年で何人の現地指導者を育成するかなど、具体的な目標を持って車いすダンスを提供し、指導者には指導者資格を与え、継続的講習が受けられるようなシステムの構築も考える必要がある。

6. 本プロジェクトを支える認定 NPO 法人の可能性と限界

認定 NPO 法人 WAFCA（アジア車いす交流センター）は、アジアにおける障がいのある子どもたちの自立支援を目的に活動を展開している。特に海外における活動は①車いす支援事業 ②障がい児教育支援事業 ③交流事業の3つの柱で成立している。本活動は、その3本柱の1つである交流事業として、また支援の方法によっては障がい児教育支援事業として位置付くと考えられる。

車いすダンスの提供は、障がいのある子どもたちやその家族及び関係する人たちに、車いすダンスという楽しみ方を提供することだけが目的ではない。著者が考えるこの活動の目的は、① 障がいのある子どもたちが健康な日常生活を送るためには、健常児と同じように身体活動を行うことが重要であることを理解してもらうこと。② 車いすダンスは多くの仲間と共に楽しめる身体活動であり、子どもたちの社会性を育む教育的側面を兼ね備えていること。③ 障がいのある子どもはもちろん、その家族や子どもたちに関わる人たちが、子どもたちと共に日常生活をより楽しむことが良いことであるという、当たり前の価値観を再認識してもらうことである。

この活動を安全に行っていくためには、海外拠点である WAFCAT 及び WAFCAI が、障がいのある子どもたちを支援する医療関係者及び体育・スポーツの専門性に優れた人たちとの繋がりを構築し、健康な心身を保ちながら継続していく基盤を築いていくことが必要である。このことは、車いすダンスの活動支援のみならず、多くの障がいのある子どもたちの健やかな成長をサポートするためにもなくてはならない。各国の抱えている現状をさらに理解しつつ、WAFCAT 及び WAFCAI が展開していきたい事業の支援体制そのものを再考していく必要性もあると考える。

また、車いすダンスを実施する場合、WAFCAT 及び WAFCAI で支援している子どもたちが参加している団体であることが望ましいと言われている。よって車いすダンスを提供することに決まった団体を1つの開拓地と考え、その団体の中で新たな支援児を発掘し、その子どもを多様な活動を通して支援していくのも1つのあり方であると考え。こういった展開でのインシアティブをとるのが WAFCA であるが、そのためにも車いすダンスの今後のビジョンやその提供が意味する重要な観点（著者が考える車いすダンス提供の目的）を各国のスタッフと共有しなければならない。しかし、このような点については、各国の福祉政策等^[8]にも連動するため、現地にいなければ理解しにくい問題も浮上するだろう。よって根気よく、WAFCA と WAFCAT 並びに WAFCAI が、現地の状況を十分に把握した上で現在及び今後の支援のあり方についてさらなる議論を重ねていくべきである。日本国内に中心となる拠点を起き、海外にも

拠点を置きながら、アジアの障がいのある子どもたちの自立を支援する認定 NPO 法人 WAFCA は唯一無二の存在である。支援する子どもたちの望ましい未来の姿が現実となるように、この活動に責任を持って取り組まなければならない。

7. まとめ

本研究は、日本に中心的拠点を置き、アジアの障がいのある子どもたち（特にタイ、インドネシアおよび中国）の自立を支援する認定 NPO 法人 WAFCA が、2017年度から海外の活動に加えた「車いすダンス」を通して、さらなる支援の広がりや深まりを期待できるかどうかを探ったものである。車いすダンスは、WAFCA の 3 つの活動の柱の 2 つにリンクする活動であり、車いすダンス活動の展開の仕方によっては、様々な他の支援をも支える活動になる。また、このような諸活動の連動が、新しい形の支援の構築につながる可能性もある。そのためには、WAFCA が車いすダンスの提供を機とし、若手の人材育成ができたり、支援する子どもの発掘に繋がったり、また車いすダンスを支える人たちを広げることによって障がい児の支援がより充実することなどを伝えていく必要があると考える。各国の社会的な現状も鑑みながらも、3 つの拠点がさらに繋がりを持ち、その繋がりをベースにして現地でのより良い活動を展開していくことが大切である。

注

- (1) WAFCA ホームページから抜粋 <https://wafca.jp/aboutwafca/index32.html> 2020/9/6
- (2) GMFVS: gross motor function classification system 粗大能力運動システム
- (3) 本論文に掲載されている全ての写真は WAFCA/WAFCAT/WAFCI の許可および個人の掲載許可を得ているものである

引用参考文献

- [1] Terada K (1999). Wheelchair dancing: its effect on the improvement of QOL. In: Adapted physical activity, edited by H. Nakata. Shonan Shuppansha, Fujisawa, Japan, 153–155.
- [2] 寺田恭子, 寺田泰人. (2006). 養護学校へのダンス授業導入の試み（その 1）—中学部総合クラスの実践を中心に—, 名古屋短期大学紀要第 44 号.
- [3] Terada K, Satonaka A, Terada Y, & Suzuki N (2016). Cardiorespiratory responses during wheelchair dance in bedridden individuals with severe cerebral palsy. *Gazz Med Ital* 175, 241–247.
- [4] Terada K, Satonaka A, Terada Y, & Suzuki N (2017). Training effects of wheelchair dance on aerobic fitness in bedridden individuals with severe athetospastic cerebral palsy rated to GMFCS level V. *Eur J Phys Rehabil Med* 53, 744–750.
- [5] James H Rimmer PhD. (2001). Physical fitness levels of persons with cerebral palsy. *Developmental Medicine & Child Neurology*, 43: 208–212.
- [6] Rose J, Gamble J, Medeiros J, Perker R. (1985). Energy cost index as an estimate of energy expenditure of cerebral palsied children during assisted ambulation. *Developmental Medicine & Child Neurology*.

- 27: 485-940.
- [7] Pitetti K, Fernandez J, Lanciault M. (1991). Feasibility of an adapted Physical Activity Quarterly. 8: 333-341.
- [8] 河合康. (2003). インドネシアにおける障害児教育の史的発達と現状. 上越教育大学研究紀要 第23巻第2号, 511-526.
- [9] Kyoko TERADA, Ayako SATONSKA, Yasuto TERADA, Nobuharu SUZUKI. (2018). Nutritional aspects of a year-long wheelchair dance intervention in bedridden individuals with severe athetospastic cerebral palsy rated to GMFCS level V. *Gazz Med Ital.* 177: 360-366.
- [10] 藤田紀昭. (2018). 障害者スポーツ、パラリンピック及び障害者に対する意識に関する研究 第2報～2014年と2016年の比較を中心として～. 日本福祉大学スポーツ科学論集 第1巻, 23-33.

付記

本研究は2019年度桜花学園大学特別研究費の助成を受け実施したものである。

(受理日 2020年9月14日)